

## 石川県小松市 竹村 信一



### 事例のポイント

- 780a の有機 J A S 認定水稲栽培実施
- 除草対策はチェーンや揺動式除草機で対応
- 平成元年より有用微生物（EM）を活用して土づくりを行っている

## 1. はじめに

石川県の事業で「生き物の生態系を残す」「昔の建物や生き物を見直す」といった自然環境整備事業に係わりをもったことから平成6年より自然農法栽培に取り組み始めた。

初年度は、自分でも驚くほどの豊作であった。稲株は太く、完熟した玄米は美しいアメ色を呈しており味もすこぶる美味しい米ができた。

このことで今後の安全で安心できる地域づくりに大きな力となると自信を得た。気がつくとも自然農法のほ場にだけツバメが飛来しているのに気がついた。ほ場をよく観察するとヤゴやカエル、タニシ、アメンボなどが多く生息していた。農薬や化学肥料を使用しない田んぼに、小さい生き物たちが戻ってきたのです。秋には黄金色の稲穂の上を赤トンボが乱舞するこの光景は、子供の頃に見た懐かしく美しい景色でした。これこそが「生き物の生態系を残す」「昔の生き物を見直す」という、自然環境整備事業がなすべき景色であると思った。



また、自然農法を通し、住みよい社会を目指す中で自然から学んだことは、田んぼとその奥に広がる里山の風景でした。「里山が健全でなければ、水田の健全はあり得ない」と思った。里山と水田は、日本が世界に誇る美しい景色です。そこには自然と人間が共存共栄している姿があります。そんな美しい自然環境を将来に、子供や孫に残してあげたいと日々取り組んでいる。平成12年に仲間と護国寺生産グループを組織し、(財)自然農法国際研究開発センターの有機 J A S 認証を受けた。



## 2. 経営の概況

ほ場780aは弟と2人で栽培している。

## 3. 栽培圃場の概要

### 1) 圃場の立地と周囲の地形

小松市は、北陸随一の工業地帯として知られている。平野部には住宅地が集中しているが、田畑が多く、米の産地となっている。山地はブナなど森林に覆われており、豊かな自然が残っている。有名なものとしては歌舞伎の定番『勸進帳』の舞台安宅の関や栗津温泉近くの那谷寺は奇観を有する境内が有名で、秋の紅葉が特に美しく自然や文化にも恵まれている。

### 2) 栽培条件

### 3) 圃場の課題と育土の方向

毎年秋処理を行い土作りを行ってきた結果、トロトロ層が発達してきており除草体系も変化してきて

いる。

#### 4. 具体的な栽培技術

##### 1) 耕起～作付けの準備

【秋作業】 コンバインで収穫（稲ワラを全量還元）後、10月中旬にEMボカシ、焼成有機資材を攪拌し散布後、耕起を行う。

【春作業】 5月上旬に畦塗りをして漏水を防ぐ対策後に耕起を行う。代掻きを行い、EM活性液を散布する。5月下旬に有機資材を側条田植機で散布しながら田植えを行う。



##### 2) 播種・育苗～定植

9月に自家採種した種籾を風選し4月上旬に脱芒機を使用する。塩水選は自然塩を使用し卵が浮く状態の濃度で行う。その後EM希釈液に浸け、鳩胸状態に発芽するのを待って播種する。育苗培土は使用せず最近開発された軽くて扱いやすいEM活用の育苗マットを使用している。播種後、無肥料の土を被覆し灌水する。育苗箱を農舎内に積み上げ生育するまで置く。その後、露地の育苗場所に移しシートを被せプール育苗を行う。苗が育ったらシートを取り3日に一度の割合でローラーをかける。

##### 3) 雑草対策

除草には手作りのチェーン除草機や揺動式除草機を使い生育状況に応じて対応している。

##### 4) 中間～後期の管理

5月、6月にEM活性液を散布し、生育状況を確認しながら有機資材を散布する。

##### 5) 病害虫の管理と対策

カメムシの被害予防対策として発生時期とほ場に入る時期などを見計らって畦草刈りを行って対応している。

##### 5) 収穫作業の手順と収穫後の調整・出荷基準等

出来るだけほ場に於いて稔らすように心がけている。天候の良い日を選び稲刈り時の籾の水分が20%以下を心がけている。稲刈りも消費者との交流を図るために稲刈り体験日を設け手刈りを行い収穫の喜びを体験していただいている。

消費者のニーズに対応するために玄米色彩選別機を導入し良質米の提供に努めている。

#### 5. 今後の課題や取り組みたいこと

「お父さんのお米が美味しい」と嫁に行った娘から嬉しい便り、一生懸命作ったお米を、娘や孫が「美味しい」と言ってくれる。こんな幸せなことはありません。「よし、今年も美味しいお米を作るぞ!」と気込みが湧いてきますと語っています。

この取り組みが志賀町や近隣に拡大しつつあります。家族始め消費者から感謝される自然農法栽培農家の普及に尽力しております。平成22年度から始まったEM研究所の技術提携農家として地域のEMを活用した自然農法の普及に努めておられる。



全国EM技術交流会より抜粋引用